

黙示録18章「大バビロンの崩壊」

1A 大バビロンへの裁き 1-8

1B 天の栄光 1-3

2B 行ないへの報い 4-8

1C 脱出 4-5

2C 苦しみと悲しみ 6-8

2A 世の悲しみ 9-20

1B 損害を受ける世 9-20

1C 地の王たち 9-10

2C 地上の商人たち 11-16

3C 船舶の人たち 17-19

4C 天の喜び 20

2B 沈む大いなる都 21-24

本文

黙示録 18 章を見ていきます。私たちは 17 章から、大淫婦と呼ばれる大バビロンの幻を読み始めました。それは、地上の王たちとの「淫行」という言葉があるように、本来、主なる神のみに自分の魂を任せ、この方に従い、仕えるべきなのに、他の神々に追従する偽りの宗教のことを話しています。世の制度に組み込まれた宗教です。宗教が、権力や富を得るための手段になっていると言えます。これが、「秘められた意味」とであると書かれていました。これは、過去には隠されていたが、今は明らかにされているものです。

人類の歴史の中で、バビロンという存在は、実にエデンの園から始まっており、そのサタンの墮落と策略が始まりました。バベルの塔において明らかになり、けれども、ネブカドネツアルによる新バビロニア帝国がエルサレムを破壊して、ユダの民を捕え移すことによって歴史の中に出てきました。そしてローマ帝国が、エルサレムを再び破壊し、ユダヤ人が奴隷として捕え移され、世界に散っていったというところにも現れたのです。しかし、終わりの日にはそれが完全な形で現れます。かつてのローマ帝国が復興するような形で十の連合体が現れ、その中で反キリストが台頭して、その連合体は彼を神とする宗教、世界帝国でまとまります。その時、バビロンという宗教に利用価値がなくなり、それで他の王たちと共同でバビロンを倒すのです。それが 17 章の最後、15-18 節に書かれていました。

18 章においては、その女の淫行の部分ではなく、巨大な富のほうに焦点を当てています。巨大な富、誰にも支配されず、説明責任のない富が蓄積されるシステムです。17 章が宗教的バビロン

と呼ぶならば、18章は商業的バビロンと呼んでよいでしょう。

ところで、私たちは16章19節で大患難の終わりに、ハルマゲドンの戦いの後にバビロンが崩壊する姿を見ました。「あの大きな都は三つの部分に裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。神は大バビロンを忘れず、ご自分の激しい憤りのぶどう酒の杯を与えられた。」この大地震によって、都そのものが破壊されます。けれども、反キリストが神となる世界帝国は、第七十週目、ダニエルの七年間の半ばに始まります。その時に反キリストは宗教バビロンを滅ぼしています。ですから、同じバビロンでも、17章は宗教的側面が倒れることを意味して、18章は経済的要素、商業的な側面のバビロンが崩壊するのではないかと思います。バビロンが商業としてはそのまま残っており、しかし宗教についてはエルサレムで反キリストが神殿の中であがめられているという体制です。

新約聖書において、コスモスと言うギリシア語が「世」と訳されています。これは、物理的な世界も表しますが、神に反抗する人間の制度や体制も表します。ヨハネ第一2章に、そのことがかかれています。「2:15-17 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」ここにあるように、世はキリスト者に敵対しています。世を愛せば神の愛はなく、神の愛があれば世への愛はありません。けれども、終わりの日に世とその欲を主は滅ぼされます。そして神の御心を行なう者たちのみが、いつまでも永らえます。

ですから、17章において世の制度に組み込まれた宗教が過ぎ去ること、18章においては富についての制度が過ぎ去ります。そして19章では、政治的権力、反キリストと諸国の軍隊がキリストご自身によって滅ぶのです。世にある宗教、商業、そして政治・軍事勢力が滅びます。

元旦礼拝でもお話ししましたが、統一協会のことがきっかけで、宗教の中身に国が関与する余地をつくる環境が出来つつあります。戦時中に国が治安維持の名の下で、キリストの再臨や復活にまで入り込んできた歴史があります。世界には、国が宗教の中身に入り込んでいるところが、今もたくさんあります。そこで、国の意向に合わせて信じていることを曲げると、まさに国と宗教の連合体ができるのです。最近では、ロシア正教がロシアのしていることとそのままくっついている姿を見えていますね。ロシア正教は巨大な富を得ているとも言われます。その反面、ロシアのしていることに良心的に従えないと思うキリスト者が、牢屋に入れられたりしています。

しかし、ロシア正教が貪欲であるから、バビロンの女のようになってしまうとも言えないのです。正教会ほど、迫害を受けてきた教派はいないと言われていています。イスラム教の中でも、ソ連の無神論共産党の中でも、激しい弾圧を受けてきました。日本の正教会の司祭さんが教えてくだ

さいましたが、戦前にプロテスタントの教会は、天皇崇拝に抵抗して迫害を受けたけれども、それに加えて、ロシア、ソ連につながっているとして公安の監視対象になっていたそうです。このように、国に逆らうととんでもない目にあうというトラウマがあるので、お上には逆らわないということが骨身に沁みているのだそうです。そう見れば、私たち日本のキリスト者も同じでしょうか。村八分を、未だに恐れている日本の社会であり、キリスト者になる人、なっても信仰を表明しない人が多いのは、クリシタンの徹底弾圧を行って、檀家制度の中で家の信仰が植え付けられて、五人組で連座制にさせられた、というのがあっていいでしょう。ですから、他人事ではないです。

そして、もう一つ私たちが、真剣に考えないといけないことがあります。それは、経済的に豊かにされている社会の中で、真実に信仰を守っていこうとして迫害されている人々がいることを考えてもいないこと。いつまでも、この豊かな社会が続いていくと思ってしまうこと。これに対する、大きな警告が、この 18 章にはあるということです。苦しんでいる兄弟たちを省みない罪が、いかに重いかを知らなければいけないという警告です。

1A 大バビロンへの裁き 1-8

1B 天の栄光 1-3

¹ その後、私は、もう一人の御使いが、大きな権威を持って天から下って来るのを見た。地はその栄光によって照らされた。

18 章では、語っている存在が三つ出てきます。1-3 節では、ここの大きな権威を持っている御使いです。そして、4-20 節が天からの声です。21-24 節までが、また別の御使いです。その初めの 1-3 節ですが、御使いが大きな権威を帯びて、栄光までを輝かせてやってきました。つまり、神の権威と栄光を現しているのです。その力と光によって、世にあるバビロンの姿が映し出されています。そこは、汚れた霊どもの巣窟であり、不品行と富で乱れていた世界でした。

² 彼は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。」

御使いは、「倒れた」と二度、叫んでいます。これは、古代のバビロン帝国が倒壊する預言をしたイザヤの言葉から来ているものです。「21:9 見てください。今、戦車や兵士、二列に並んだ騎兵が来ます。彼らは互いに言っています。『倒れた。バビロンは倒れた。その国の神々の、すべての刻んだ像も地に打ち砕かれた』と。」これは、メディア・ペルシア連合軍がバビロンの町に侵入した時の幻です。ダニエル書 5 章に、その最後の晩にベルシャツアルが何をしていたかが書かれています。エルサレムの神の宮から持ってきた器を宴会の場に持ってこさせて、神々の名を賛美しました。しかし、人の手の指が壁に文字を書きました。ダニエルがそれを解き明かし、バビロンが倒れることを告げました。ベルシャツアルは、彼に褒美を与えましたが、その夜に彼は殺されました(5:30)。

このように、突如として破壊が来たのです。

バビロンは、とてつもなく栄華に富んでいた都であり、かつ要塞がとてつもなく強いものでした。ユーフラテス川が真ん中を流れていて、水には困りません。地下に深く埋め込まれている厚い城壁があり、侵入はほぼ不可能に思われました。備蓄があったので、20年は持つといわれていました。ベルシャツアルは、バビロンの国の町々がメディアとペルシアに攻め込まれていることを知っていたいながら、バビロンの都は沈まないと思っていたのです。しかし、ペルシアの王キュロスは、ユーフラテス川から堀を作って、水を迂回させ、水位を低くして、水門の下からはいり込んでいったのです。それから、川の両側は壁があり、青銅の門からしか入れませんでした。その護衛たちも酒に酔っていて、無防備であり、王宮の中に難なく入ることができました。これが、「倒れた、倒れた」と叫んでいる背景にあります。つまり、滅びが近づいているのに、「自分だけは大丈夫だ」と思い込んでいる奢りに対して、裁きが宣言されているのです。

そしてここが、「悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巢窟、あらゆる汚れた鳥の巢窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巢窟」とあります。バビロンの崩壊については、イザヤ書 13-14 章とエレミヤ書 50-51 章に詳しく幻があります。その中で、バビロンは永遠の廃墟となるとあります。「13:21-22 そこには荒野の獣が伏し、彼らの家々には、みみずくがあふれる。そこには、だちょうも住み、雄やぎがそこで飛び跳ねる。山犬はその砦で、ジャッカルは豪華な宮殿でほえ交わす。その時が来るのは近く、その日はもう延ばされることはない。」このように廃墟となっていますが、そこに同時に、悪霊どもが住まいとしているということです。ゼカリヤ書 5 章にも、バビロンの悪霊、不正な富、そして霊的不品行が幻となって表れています。

イエス様が再臨される時に、第七の鉢がぶちまけられるところですが、この都は三つに分かれることが 16 章に書かれています。そして黙示録には、人類の初めの時からいて、終わりの日まで、黙示録でもユーフラテスのところにある悪霊どもの存在を上げていますが、悪霊どもが、廃墟となったバビロンに徘徊するところとなるのです。地上における神の国、千年王国において、バビロンは永遠に廃墟とされています。地上における地獄とでもいいでしょうか、主による新しい創造から完全に漏れて、悪霊どもが住んでいるところを見せ、ですから、神の栄光に富むエルサレムと鮮やかに対比しているのです。

³ すべての国々の民は、御怒りを招く彼女の淫行のぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫らなことを行い、地の商人たちは、彼女の過度のぜいたくによって富を得たからだ。」

これは、17 章においても宣言されていたことですが、付け足されているのは、商人たちが「彼女の過度のぜいたくによって富を得た」というところです。バビロンの商業主義に対する裁きが、この章においては際立っています。

2B 行ないへの報い 4-8

1C 脱出 4-5

⁴ それから私は、天からもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わたしの民は、この女の罪に関わらないように、その災害に巻き込まれないように、彼女のところから出て行きなさい。

ここの、「わたしの民」とは誰のことでしょうか？一つは、患難期の終わりにいるユダヤ人の残りの民のことでしょう。そして、異邦人で忠実な異邦人たちでしょう。そこにいる神の民が、バビロンを離れるように命じられているのです。当時のバビロンにおいて、その都がペルシアの前に倒れても、ユダヤ人がエルサレムに帰還する人々は五万人程度でした。けれども、多くはそのまま居残ったのです。それはそこで定住し、奴隷の身でありながら栄えていたからです。けれども、その安定した生活はすぐに過ぎ去るのだということを神は警告しています。「エレミヤ 51:6 バビロンの中から逃げ、それぞれ自分自身を救え。バビロンの咎のために絶ち滅ぼされるな。これは、【主】の復讐の時、主がこれに報いをなさるからだ。」ゼカリヤ書 2 章にも、バビロンから逃げなさいという命令が書かれています。

私たちは、ですから、押し寄せる世の波、バビロンのなもから離れなければいけないのです。関わるな、災害に巻き込まれるなという危険性があります。どれだけ、今の自分の快適な生活に満足してしまっていることでしょうか？

⁵ 彼女の罪は積み重なって天に達し、神は彼女の不正を覚えておられるからです。

罪が天に達しているというのは、主が罪に対して忍耐しておられたけれども、今や怒りを示す時だということです。主が、アブラハムに語られたことを思い出してください。「創世 15:16 そして、四代目の者たちがここに帰って来る。それは、アモリ人の咎が、その時まで満ちることがないからである。」アモリ人またカナン人は、その地で主が忌み嫌うべきことを行なっていました。その裁きは、アブラハムから四代目の者たちが戻って来て、そして彼らを根絶やしにしないと命じられる時までは、満ちることはないと言われています。主が忍耐しておられたからです。しかし主は、「彼女の不正を覚えておられる」とあります。主は悪を容認される方ではありません。その義のゆえに、聖なるご性質のゆえに、必ず不正については覚えておられます。

2C 苦しみと悲しみ 6-8

⁶ あなたがたは、彼女が支払ったとおりに彼女に報いなさい。彼女の行いに応じて倍にして返しなさい。彼女が混ぜ合わせた杯の中に、彼女のために倍のものを混ぜ合わせなさい。

神は、報復、報いの原理をここで語っておられます。自分の蒔いたものは、刈り取るという原理です。バビロンについては、イザヤ書 50 章 29 節に、また、詩篇 137 篇 8 節にもあります。「娘バ

バビロンよ荒らされるべき者よ。幸いなことよ おまえが私たちにしたことには返しする人は。」

二倍にして戻すとありますが、これは出エジプト記 22 章 4 節から来ている律法です。物を盗んだ者がいる時に、彼は二倍にして返済しなければならないことが書かれています。なぜなら、物理的に盗んだ物を返してもらうのは当然のことです。けれども、物を盗むということは、その所有者の尊厳や権利、主の与えられたものに害を及ぼすことです。それゆえ、その精神的損傷を補うために、その物品や所有物を返すだけでなく、同じものをさらに加えて返します。そこで、自分たちがバビロンから取られたものを、二倍にして受け取るのは当然の権利だということだということです。

⁷ 彼女が自分を誇り、ぜいたくにふけた分だけ、苦しみと悲しみを彼女に与えなさい。彼女は心の中で『私は女王として座し、やもめではない。だから悲しみにあうことはない』と言っているからです。

高ぶりに対しても裁きを下されます。安心している姿、自分たちはこの楽しみがずっと続くという安逸に対して裁きが下ります。「イザヤ 47:8 だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住む女よ。心の中で、『私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくてすむ』と言う者よ。」私だけは特別だ、これは直訳すると、「わたしだけで、他にはいない」という、主ご自身がご自分のことを言い表す時に使われた言い回しです。それを言っているのですから、私は神だと言っているに等しいです。

どうして、そのように富が集まるのか？それは、数多くの人々が犠牲になっているからです。奴隷、貧しい人々、虐げている人々がいて、それで富を得ています。こうした犠牲に対して、省みる心がないというのが問題なのです。私たち日本の社会は、世界において GDP 三位の国です。経済大国です。そして民主主義体制で、それぞれ人権と自由が守られています。けれども、これが多大な犠牲の上になり立っていることを忘れてはいけません。過去には、多くの人々が戦争で犠牲を払いました。貧しさも経験しました。そうした先人たちのことを思うべきですね。そして、今、私たちが自由に礼拝を献げることができるのは、欧米において長い歴史で多くの血が流されて、それで信教の自由というものを得たということがあります。日本では、キリシタン殉教の歴史があり、戦時中はホーリネス教会に対する弾圧があり、それで今、私たちは自由に礼拝できているのです。

このことを忘れてしまっている社会や教会は、「私は女王として座し、やもめではない。だから悲しみにあうことはない」という心に近づいてしまいます。バビロンが大淫婦として、金の杯で聖徒たちの血を飲んでいることを思い出してください。それを全くないがしろにしているところに、彼女の高ぶりがありました。私たちは、このバビロンに絡まれてはいけません。

⁸ これらのことのため、一日のうちに、様々な災害、死病と悲しみと飢えが彼女を襲います。そして、

彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく神である主は、力ある方なのです。」

「一日のうちに」であります。先に、イザヤなどが預言した通りです。富によって高ぶっている時の破壊は、突如としたものです。ベルシャツアルがそうでしたが、金持ちの喩えは有名ですね。「ルカ 12:20 愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いつたいたれのものになるのか。」今のインフレや物価高などは、主がもしかしたら、少しずつ注意喚起をしておられるのかもしれませんが。これまでの考え方では、いけないのだよということを教えておられるのでしょう。

2A 世の悲しみ 9-20

そして次、9 節から 19 節は、世の悲しみが書かれています。バビロンが倒れたことによって、三つの種類の人々が嘆き悲しみます。地上の王たち、次に地上の商人たち、それから船舶で働く人々です。自分たちの収益が無くなることに対して、嘆き悲しんでいます。

ここからの預言は、ツロに対する神の裁きの預言が背景になっていると思われます。エゼキエル 27 章です。エゼキエル書に、26 章から 27 章までツロに対する裁きの宣言があります。ツロは、今のレバノンにある、当時の都市国家です。地中海をまたにかけて、その沿岸地域に植民都市を造って行きました。海軍が非常に強かったので、地中海の世界貿易を占有していました。ツロに莫大な富が集まりました。けれども、バビロンによって包囲され、次にギリシアによって包囲されて、滅ぼされます。そのことが 26 章に書かれていて、27 章には、世界の国々との商いについて書かれています。そして、タルシシュ船という、最大級の国際貿易の船が、その栄えの絶頂期に、海の真ん中で沈んでしまいます。そして、船員たちも、商人たちも、王たちもそのことで大いに恐れ、嘆き悲しんでいる姿が出てきます。

でも、これはツロに対する預言ですね？どうして、バビロンに対する預言にツロに対する預言が関わるのか？28 章を見ますと、ツロの王は、人間の王の背後にいる王こそがまことの王であり、高ぶったケルブであることが書かれています。サタンのことです。バビロンの王の背後にも、明けの明星としてサタンが、イザヤ書 14 章に出てきました。ですから、バビロンは、特定の都ではありませんが、世界中に世の制度が浸透していると考えたほうがいいです。世の神はサタンだからです。

1B 損害を受ける世 9-20

1C 地の王たち 9-10

⁹ 彼女と淫らなことを行い、ぜいたくをした地の王たちは、彼女が焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣いて胸を打ちたく。¹⁰ 彼らは遠く離れて立ち、彼女の苦しみに恐れをなして、「わざわざ、わざわざ、大きな都、力強い都バビロンよ。あなたのさばきは一瞬にしてなされた」と言う。

地上の王たちです。遠くで離れて立っているのは、非常に高熱の火によって燃えているからでしょう。為政者は、国のため、民のために働く公僕です。ダビデのように、自分の民ではなく、神の民であることを知って、養うのです。ところが、自分たちの腹を肥やすことで、そのためにバビロンは利用しやすい存在だったのです。これが彼らの淫行でした。権力を持っている人々には、とてつもない強い力が働いていることでしょう。私たちは、指導者たちのために祈るべきです。

2C 地上の商人たち 11-16

¹¹ また、地の商人たちは彼女のことで泣き悲しむ。彼らの商品を買う者が、もはやだれもいないからである。¹² 商品とは、金、銀、宝石、真珠、亜麻布、紫布、絹、緋色の布、あらゆる香木、あらゆる象牙細工、高価な木材や青銅や鉄や大理石で造ったあらゆる器具、¹³ シナモン、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、小麦粉、小麦、家畜、羊、馬、馬車、奴隷、それに人のいのちである。

商人たちは、バビロンによる貿易によって収益を得ていたので、彼らが最も大きな損害を受けています。世の悲しみは、彼らのように、罪のために悲しむのではなく、収益を失って悲しみます。多くの人が、自分が損をして悲しみますが、罪のゆえに悔恨して、へりくだる人は少ないです。パウロはこう説明しました。「2コリント 7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

そして、ここにある商品は贅沢品です。ツロに対する神の裁きの宣言において、出て来るような品々です。彼らのタルシシュの船が地中海の真ん中で沈みます。そして、地の王たち、商人たち、住民たちが非常に恐れることが書かれています。この商品の中に、「奴隷、また人のいのち」とあります。直訳は「肉体」と書いてあります。つまり、彼らは奴隷にされているだけでなく、商品として肉体が売られていたのです。当時のローマは、コロセウムという競技場で盛大なエンターテイメントがありました。剣闘士がどちらかが死ぬまで戦います。生きている者たちが、獅子によって食い殺されていくのを見物します。その中に、キリスト者がいました。彼らは生きたまま木にかけられ火あぶりにされ、獅子に食い殺されますが、それを観衆が楽しんで見ていたのです。

¹⁴「おまえの心が欲しがる果物は、おまえから遠ざかり、ぜいたくな物や華やかな物は、すべておまえから消え失せて、もはや決して見出すことはできない。」¹⁵これらの物を商って彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみに恐れをなして、遠く離れて立ち、泣き悲しんで言う。¹⁶「わざわざいだ、わざわざいだ、大きな都よ。亜麻布、紫布、緋色の布をまとい、金、宝石、真珠で身を飾っていたが、^{17a} あれほどの富が、一瞬にして荒廃に帰ってしまった。」

「くだもの」という表現が興味深いです。「ヤコブ 1:15 そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」しかし主は、その欲望が熟するままにずっとしておかれるのではありません。

地上の王たちと同じように、商人たちは、遠く離れて泣き悲しんでいます。その贅沢な姿が無くなってしまったことに対する悲しみです。

3C 船舶の人たち 17-19

^{17b} また、すべての船長、その場所を航海するすべての者たち、水夫たち、海で働く者たちもみな、遠く離れて立ち、¹⁸ 彼女が焼かれる煙を見て、「これほどの大きな都がほかにあつたらうか」と叫んだ。¹⁹ 彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫んだ。「わざわいだ、わざわいだ、大きな都よ。海に船を持つ者たちはみな、ここでその繁栄から富を得ていたのに、その都が一瞬にして荒れ果ててしまうとは。」

船舶業は、大きな損害を受けます。けれども、四つ目のグループは喜びにあふれます。これまでは地上の者たち、海にいる者たちが悲しんでいましたが、次は天にいる者たちです。

4C 天の喜び 20

²⁰「天よ、この都のことで喜べ。聖徒たちも使徒たちも預言者たちも喜べ。神があなたがたのために、この都をさばかれたのだから。」

あまりにも対照的です。同じバビロンの崩壊を、一方は悲しみ、もう一方は喜んでいるのです。世の愛は神の愛とは相いれないことが、ここによく表れています。そしてこの声を上げているのは、「天にいる聖徒たち、使徒たち、預言者たち」です。彼らは、患難の時に殉教した聖徒たちはいるでしょうが、使徒たち、預言者たちというのは新約聖書において、教会を建て上げる礎をキリストにあって据えた人々として出て来ます(エペソ 2 章)。彼らもまた、霊的にバビロンの制度、世の制度の中で、そのほとんどが殉教しています。ここで、彼らの信仰について、神が正しい裁きを行なわれたのです。

もし私たちが、世に対する未練があれば、それが過ぎ去るのは悲しいでしょう。けれども、天に対する希望があれば、むしろ世が過ぎ去るのは喜びでしょう。

2B 沈む大いなる都 21-24

²¹ また、一人の強い御使いが、大きいひき臼のような石を取り上げ、海に投げ込んで言った。「大きな都バビロンは、このように荒々しく投げ捨てられ、もはや決して見出されることはない。」

三つ目に、声かけをした存在です。別の力強い御使いです。彼は、大きな石を海に投げ入れていて、それが浮かんでこない、永遠に滅んでいる、沈んでいることを象徴して表しました。これはエレミヤが主から行ないなさいと命じられたものと同じです。「51:63-64 そしてこの書物を読み終えたら、それに石を結び付けて、ユーフラテス川の中に投げ入れ、こう言いなさい。『このように、バ

ビロンは沈み、浮かび上がれない。わたしがもたらすわざわいを前にして。彼らは力尽きる。』」ここまでが、エレミヤのことばである。」もう再び浮上して、神を愛する者たちを苦しめることはないのだ、という保障であります。

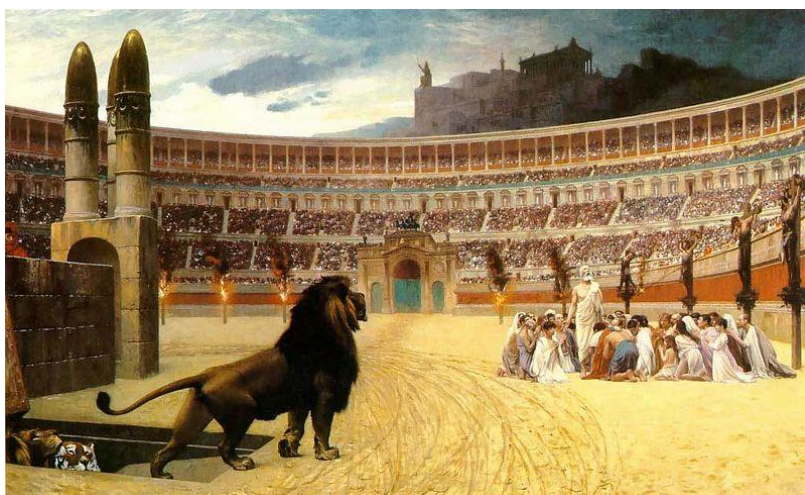
²² 豎琴を弾く者たち、歌を歌う者たち、笛を吹く者たち、ラッパを鳴らす者たちの奏でる音が、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。あらゆる技術を持つ職人たちも、おまえのうちで、もはや決して見出されることはない。石臼の音も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。²³ ともしびの光も、おまえのうちで、もはや決して輝くことはない。花婿と花嫁の声も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。というのは、おまえの商人たちが地上で権力を握り、おまえの魔術によってすべての国々の民が惑わされ、

これは、放漫な生活における喜び、楽しみがなくなることを言い表しています。これが、以前ではノアの時代で、洪水が来る前の状態でした。「マタイ 24:38 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。」

ところでこの、「魔術」という言葉は、麻薬によってもたらされる意味合いもあります。つまり、「幻覚」です。商業主義というのは、人々に幻覚を見せるようにさせます。人生、生活の現実の姿を見せないようにさせます。これらは、商人たちが作り出した幻想です。仮想現実には生きているようなもので、実質がないのです。その夢から覚めれば、何もないことに気づくようなものです。

²⁴ この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたからである。」

ここが世の豊かさの裏通りにある、信仰者の姿であります。先ほどのコロセウムの話です。ローマは極度に富を持ち、それで人々が退廃していました。その中でキリスト者は血を流していました。



主は、必ず裁かれるということは、この世にあって悲しむ者、苦しんでいる者には慰めです。苦しんでいるテサロニケの人たちに、パウロはこう言いました。「Ⅱテサ 1:5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。」